

埼玉心理リハビリテーション研究会 ホームページ

<http://homepage2.nifty.com/saitama-sinri-riha/> もしくは

ウェブ 画像 動画 辞書 知恵袋 地図 リアルタイム 一覧

埼玉心理リハ

検索

月例会の様子、BBSなどいろいろな情報があります。
全国の様子を知るページとのリンクもあります。

学校教育での動作法の活用の仕方

順天堂大学名誉教授 星野 公夫

動作法は、現在用いられている障害児への指導技法の中でも、適用対象の広さ、効果の現れ方、指導技法を習得する際の簡易さ等から見て、最も優れたものと言えるでしょう。

しかし、動作法が良いからと言って、安易に学校教育に動作法を取り入れるには問題があります。ただし、これは動作法に限りません。理学療法や行動療法等全ての技法について言えることです。

そこで、動作法を学校教育に取り入れる際の考慮点を考えてみましょう。

- 1 まず、子供の実態を確認し、それに基づいて指導目標を設定し、その目標達成のためにどんな関わり方が良いかを検討し、それに基づき最も適切な方法を採用する。したがって、どんな方法を使用するかは子供の実態に基づく。
- 2 指導は子供の発達を促進するためのものであるから、指導の結果子供にどのような変化が生じたかを必ず評価する。指導は、教員が自分は指導をしているという自己満足のために行われるのであってはならない。
- 3 同時に、指導法は、教員が自分でできる方法であることも重要である。
- 4 医療機関における治療と自立活動との違いをはっきりさせる必要がある。

治療では、症状の改善が目的となる。自立活動つまり、教育では課題解決学習を通した子供の発達の促進が目的となる。その点で、学校教育と治療とでは、関わり方が同じように見えても、その目的は異なることになる。

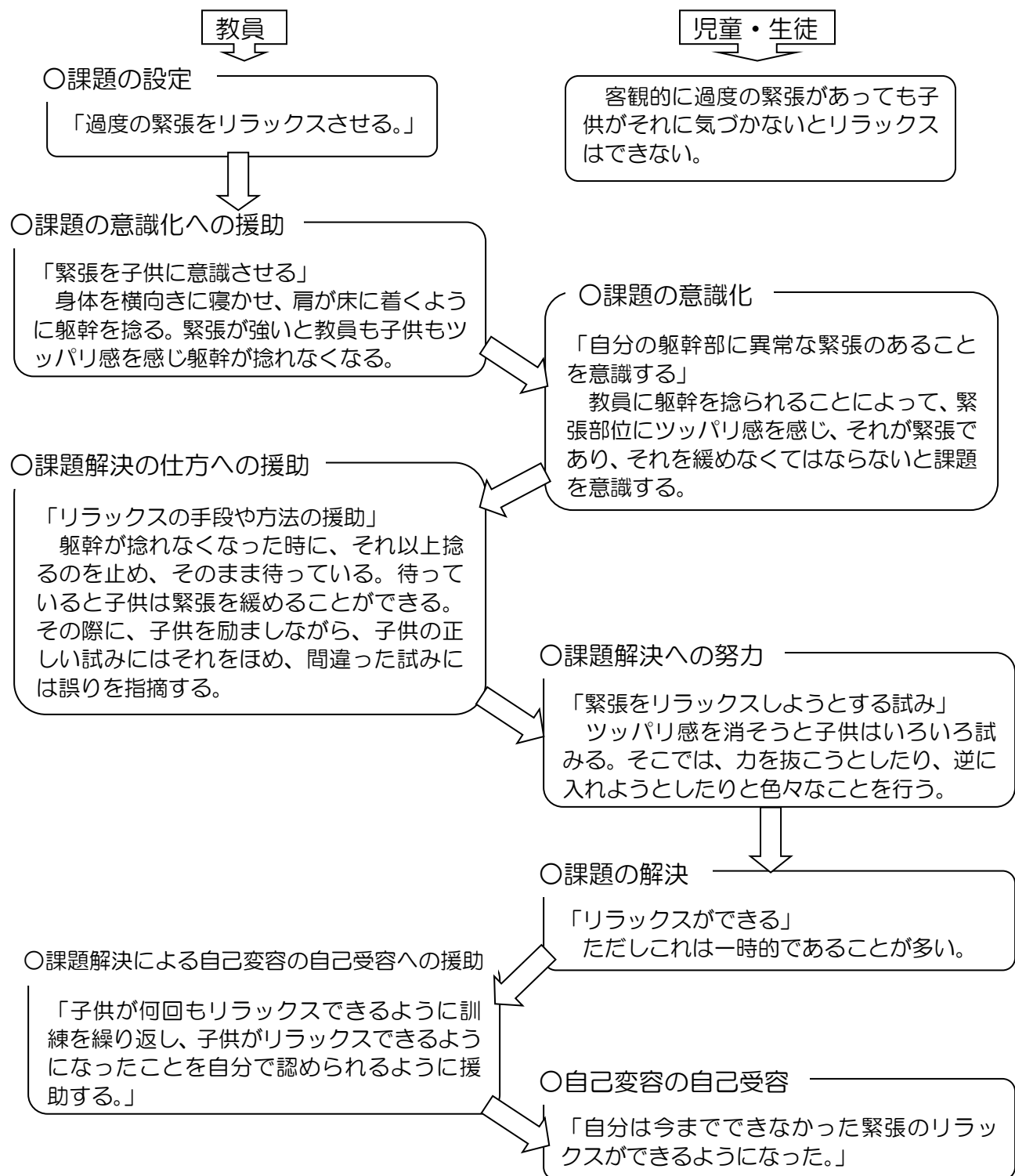
自立活動の時間の指導で症状の改善を目的とした指導を行っても悪くはない。ただし、その際には学校教育を行ったのではなく、医療機関の下請けを行ったことを認識する必要がある。つまり、教員の専門性を活かした指導とはならないと言える。

- 5 身体の訓練が課題解決学習として関われることを、具体的に
躯幹部のリラックスを例として述べる。

○躯幹部の緊張が強い

躯幹部のどこにどのような緊張があるのか実態を把握する。





身体の動きの指導の中で、教員と児童・生徒との間にこのようなやり取りの関係を作ることが出来るなら、子供は、自分で考え、自分でいろいろ試みながら自分の身体の動かし方を学習していきます。これが心理的な意味での発達です。

自分で考えると、試みると、学習するというと、重度障害の子供には無理だと思われるかもしれませんが、しかし、生まれたばかりの赤ちゃんの身体の動かし方を見てみましょう。赤ちゃんは何も言いません。しかし、その動きは反射ではありません。母乳を飲むのもだんだん

上手になります。これは学習をしているからです。人間は誰でも、自分の身体の動かし方を学習します。そこでは、無意識であっても、どうすればよいかを考え、試み、成功、失敗の経験を積み重ねながら動かし方を身につけます。重度障害児も言葉では表現しませんが、身体の動きを見るとはっきりとそれが理解できます。

ただし、このような関わりをするためには、基本的な知識をもとに自分の指導技術を高める必要があります。理学療法関係者は基本的知識として解剖学や生理学を学びます。動作法ではそのような知識は必須ではありません。しかし、その代わりに、人間の動作の見方をしっかり身につける必要があります。

これを身につけて、子供の発達の促進に関わりたいと思います。

トレーニー保護者より

私たち親子にとって、毎月第一土曜日が来るのが楽しみです。というのも心理リハの訓練を受けた後は、息子の体がとてもリラックスしているのがよくわかるからです。心理リハは、名前の如く、ただの機能回復訓練ではなくトレーニーの心理から迫るのです。「そこは力を入れない・・・」「緩んできたよ。そのままキープして。」と、トレーニーの心理や表情を読み取りながら訓練してくれます。

時々、保護者向けの講義もあり、我が子の体について分かり易く説明してくれます。ほかのお子さんについての説明も的を得ていてとてもよくわかります。

心理リハは、時間にとっても厳しいです。時間係の先生が、「訓練開始の時間です。」とか、「終了5分前です。」などといつも呼びかけています。先生方の意気込みが伝わってきます。おのずから保護者も時間を守ろうとがんばっています。

これからもまだまだお世話になります。先生方、保護者の皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。以前のように一緒にクリスマス会やお楽しみ会ができればいいなと思っています。



鈴木 潤 母・美知子

第11回 ミニ・キャンプの報告

菅原 恵

- 1 日時 : H24. 7/14 (土) ~ 16 (月)
- 2 場所 : 県民活動総合センター
- 3 テーマ : 「身体の動きを通じた支援」
- 4 メンバー構成 : <SV> 篠原弥生先生、島村隆博先生
< トレーニー (5名) > 4歳から32歳まで、幅広く8名
<シニアトレーナー> 出井一紀
<トレーナー> 尾花恵、甲斐遼太、小林智子、菅原恵、鈴木靖、白山智士、土井三恵、藤巻みのり、青柳憲充 (サブ)、岡村拓也 (サブ)、野口治子 (サブ)、西塚裕人 (サブ)

5 研修会の経過

今回のテーマ「身体の動きを通じた支援」については、キャンプを通して改めて考えること

ができました。動作法の関わりや学校での自立活動の時間における指導だけでなく、日常生活の中でどのような支援方法が有効なのか、また、どのような考え方を基盤にもっているか、参加者皆さんで考えることができたように思います。

3日間通して、どのトレーニーにも、それぞれのトレーナーとの様々な気持ちのやりとりの結果、変化が見られました。あるトレーニーは、自分の身体に注意を向け続ける、力を入れ続けるという面で変化が見られ、今後の日常生活につながることを期待できます。また、あるトレーニーは、月例会に比べてじっくりと取り組めたことで、立位でより少ない援助で身体を起こしていることができ、本人の自信にもつながったことと思います。また、あるトレーニーは、トレーナーの関わりを受け入れて緊張を緩めることや、身体を起こした姿勢をとる経験を積むことができ、3日間食事をきちんととり、程よい疲れで睡眠をとることができました。

それぞれのトレーナーにも、気持ちの変化があったことがミーティング等を通して感じました。身体を通して、相手の気持ちやその変化をしっかりと丁寧に感じ取り、フィードバックしていく動作法の関わり。これは、日常生活の中での人との関わり方にもつながりますよね。私たちトレーナーも、日常生活につながる貴重な学習の機会をいただいているのですね。

研修の時間の実技では、様々な人と順番に関わって、違いを感じたり、感じたことを伝え合ったりしました。人によって、方法や感じ方が少しずつ違うことがよく分かりました。ミーティングや討論等を通して、疑問に思っていることや意見等がたくさん出て、お互いに実技もたくさんし合うことができ、充実した研修となりました。

保護者の方々からも「参加できてよかった」「勉強になった」というご意見を多数いただきました。

このキャンプの成果を今後につなげていけるように、月例会等で振り返り、皆さんと共有していきたいと思います。



編集後記

みなさん、こんにちは。今年度も段々終わりに近づいてきましたね。1年はあっという間で、今やりたいこと、できることを、どんどんやっていかないと追いつきません…。

今回の「べてる」ですが、3年ぶりに、星野公夫先生に原稿を書いていただきました。「動作法を学校教育に取り入れる際の考慮点」は、教員として、常に頭に入れておかねばなりませんね。「自己満足の指導でなく子供の発達の促進のための指導」、肝に銘じたいと思います！！「人間の動作の見方をしっかり身につける」、私にはまだまだこれが足りないのですね…。しっかり身につけられるように今後も頑張ります！！

「トレーニー保護者より」は、今回は鈴木さんに書いていただきました。ベテラントレーニーの潤くんには、私たちも多くを学ばせてもらっています。これからもよろしくお願いします。

では、みなさん、今年も寒い日が続きますが、心と身体は温かくして乗り切りましょう♡

菅原 恵（旧姓：新井）

